

■（１４２）台風取材の安全ルール、気象庁から「注意」経験も

台風２６号で荒れた神奈川県で、小学６年生の男児２人が波にさらわれた。前日から臨時休校が決まっていたので、一緒に「お泊まり」をした後、家から海岸に通じるトンネルの中で寄せて来る波を見ていた。そこに突然の大波が襲って来たという。

猛烈な風の中で海岸に打ち付ける高波……。取材でもやはり、「最前線」にできるだけ近づきたくなる。１９９０年代には、リポーターのヘルメットが強風で飛ばされる映像が繰り返しテレビで流された。それらがあまりにも危険だと、視聴者から批判が起こった。気象庁がテレビ局に、危ない場所からの中継を止めるように要請したこともあった。

火山取材で、現場近くまで迫っていた記者やカメラマンが火砕流で犠牲になった反省もあり、テレビ・新聞は社内で災害取材のルール作りを進めてきた。東日本大震災でも、浸水地域では取材中も常にラジオを聞き、新たな津波の危険が迫ったらすぐに逃げられるようにしていた。

未明に土石流などに襲われた伊豆大島。夜が明けて、報道陣がヘリなどで被災地に向かった。今回の被害を拡大させた要因はなにか。これから核心に迫って欲しい。（山）